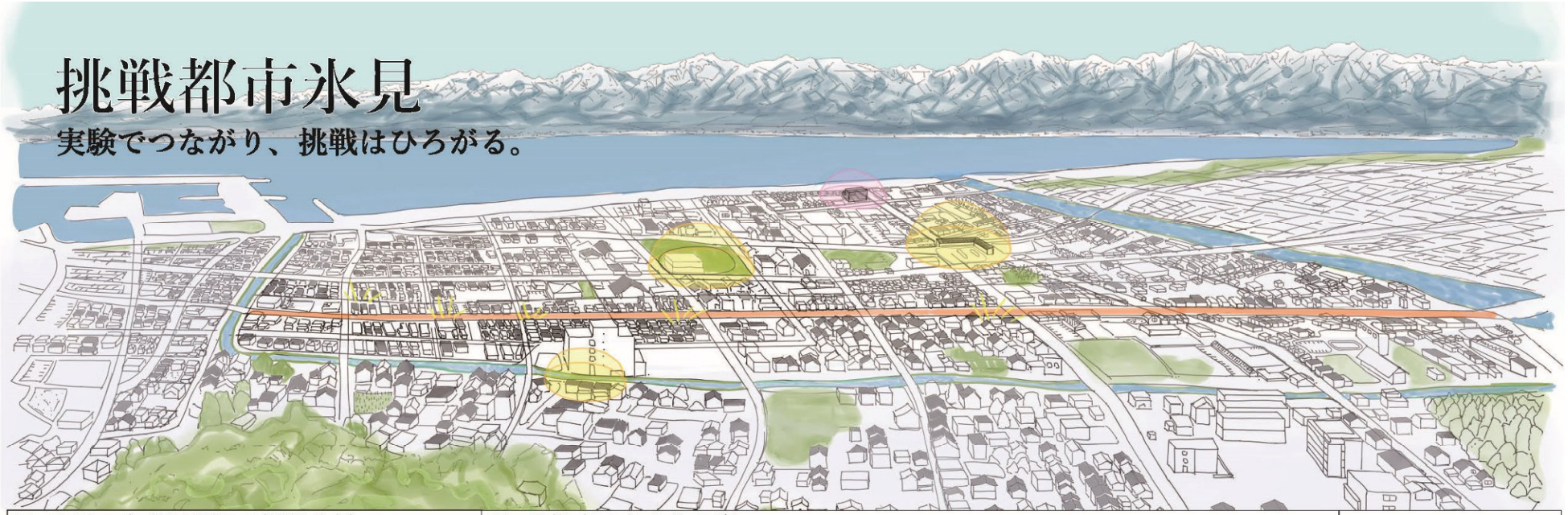
整理番号⑱-1

挑戦都市氷見

実験でつながり、挑戦はひろがる。



01 現況の氷見駅周辺の課題分析

①日常的な賑わいが創出される市民の居心地が良い空間

市内には氷見乃江公園や氷見市海浜植物園など、車でアクセス可能な距離に家族で遊べる空間が整備されている。一方で、学生などの車を持たない人々が日常的に訪れる場所が不足している。

また、氷見駅周辺の市街地には、観光客が列車の待ち時間等に滞在できる空間が十分にない状況である。



②玄関口としての賑わいが創出される来訪者が楽しめる空間

富山湾は「世界で最も美しい湾クラブ」に加盟しており、海越しに立山連峰を望む雄大な景観を楽しむことができる。

氷見駅周辺は、この富山湾に近接する恵まれた立地にある一方、駅から海辺への動線や漁火ロード沿いの人々の滞在空間が不足している。

そのため、海と立山連峰が生み出す氷見固有の景観資源が、まちなかの回遊や滞在の魅力として十分に活かされていない。



③交通結節点としての賑わいが創出される氷見駅やその他の交通の利用が促進される空間

現在、駅には市内周遊バスのみが乗り入れ、路線バスの停留所は駅から離れており、バスと電車の乗り換えが不便である。加えて、朝夕のラッシュ時は駅前ロータリーが混雑し、交通の妨げとなっている。

また、ヒミカやシェアサイクル等の域内モビリティも限られた受付場所での手続きが必要なため、利用へのハードルが高い状況にある。



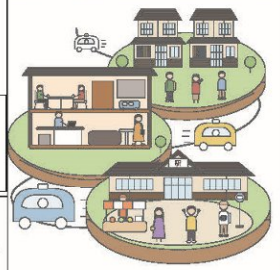
02 目指すべきまちの姿

挑戦都市氷見

誰もが何かを始められる。あちこちで誰かが動き出し、それを見た誰かがまた動き出す。
新しいことが次々と生まれ、住む人も訪れる人も「次は何が起こるのだろう」とワクワクするまち。

03 目指すべきまちの姿への道筋

交通 と リビングラボ の２軸を段階的に整備・導入し自律的な活動の広がりを仕掛ける。市民が自ら活動の担い手となるための土壌を整備し、市民の活動をまちへと広げることで、挑戦であふれるワクワクする氷見を目指す。



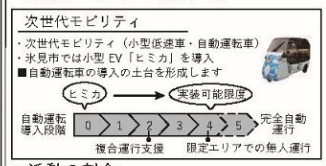
STEP1 受け皿をつくる

インフラ整備

■インフラ整備
現状の交通課題を解決し既存インフラを繋ぎ直す。また、次世代モビリティ導入のための道路整備も行う。

■公共空間整備
ロータリーや広場を一体で整備することで、日常的な賑わいや憩いの空間、玄関口としての空間、交通結節点としての機能の３つの課題を解決できるような空間にする。

次世代モビリティ
・次世代モビリティ（小型低速車・自動運転車）
・氷見市では小型 EV「ヒミカ」を導入
■自動運転車の導入の土台を形成します



■活動の割合
行政が活動基盤となるインフラへ投資をする

行政の役割

STEP2 挑戦を生む仕掛けをつくる

次世代モビリティの導入

リビングラボの形成

■次世代モビリティの導入
自動運転モビリティを中心とする、次世代モビリティ導入することで市街地に細かい交通網が広がる。既存インフラではアクセスしづらかった市街地の空き家などにも企業を誘致することが可能になり、リビングラボが市街地全体に展開する。

■リビングラボでの活動
・企業（移住者）
ラボ内での市民との協働が地域コミュニティの入り口となり、地域に馴染みやすくなり、地域の一員として活動ができるようになる。
・市民
ラボの枠組みによる直接的なメリット以外にラボでの活動を通じて新たなスキルや挑戦に対する成功体験を得ることができる。

■活動の割合
行政は企業誘致のための規制緩和策を講じる

行政の役割 | 市民の活動

STEP3 目指すべきまちの姿

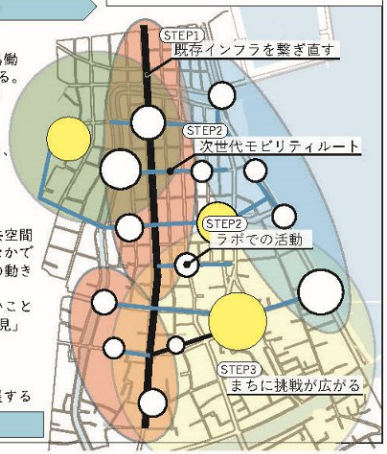
挑戦がまちに広がる

■新たなコミュニティの発生
リビングラボでの市民と移住者の協働から、新たなコミュニティが生まれる。そこにあるのは、市民と企業という立場のつながりではなく、人と人とのつながりである。この新たなつながりからラボの枠を飛び出した、新しいアイデアが生まれる。

■挑戦がまちに広がる
人と人とのつながりから生まれたコミュニティはラボを飛び出し公共空間へと活動の場を広げていく。まちなかで挑戦が繰り広げられることで、その動きは氷見全体へと一気に広がる。
こうして、まちのあちこちで新しいことが生まれ続けるとき、「挑戦都市氷見」が実現する。

■活動の割合
活動は行政の手を離れ自律的に発展する

市民の活動



整理番号⑱-2

04 ロードマップを推進する仕組み

持続的に仕事を生み、人を呼び込み、まちを動かす仕組みを、都市内での実験から育てていく。
そのために、誘致企業・市民・まちづくり団体から成る「ひみラボ」を核に、共創と挑戦を促す。

STEP1　入口形成

行政　協議会
地域課題の提示
ビジネスコンテスト開催
アプローチ
モビリティ企業

協議会の中心となる組織
- ビジネスサポートセンター「Himi-Biz」
- 氷見まちづくり協議会
- ひみまちづくりファンド
- 移住応援センター「みらいエンジン」

オフィス開業支援
空き家活用支援
移住体定支援

オフィス誘致から移住までパッケージでサポート
「移転・移住しやすいまち」をアピール

ビジコンからの誘致（ex. 徳島県美波町）
市の課題……公共交通利便性の低下
企業の課題…自動運転の実証（特に冬季積雪下）
ビジコン開催＆実証フィールド整備から
お互いに Win-Win の実証実験へ

氷見市による基盤づくり
- 規制緩和　・都市データ整備
- 制度整備　・車道整備、センサー設置

ハード・ソフト両面の整備で
「実証フィールド」をアピール

まちなかを実証フィールドにするためハード・ソフト整備を行う。同時に
ビジコンを開催、実証実験の場を求めるモビリティ企業とのマッチングを行う。

STEP2 「ひみラボ」形成

住民
- モニター
- データ共有
- イベント参加

協議会
- 移住支援
- 空き家活用仲介
- 交流イベント

モビリティ サテライト 企業
- データ利用
- 製品開発
- ラボスペース開設

ひみラボ

行政 ・ラボ開設への優遇措置

ひみラボでの各関係者のインセンティブ

モビリティ サテライト 企業	・実証フィールドの獲得 ・実際の利用データの取得→開発
企業	・サテライトオフィスの開設が容易 ・市民をモニターにした実験開発
協議会	・地域課題の吸い上げが容易 ・移住者と住民の接点の創出
移住者	・職と住の心配なく、移住が容易 ・地域住民との交流の場を獲得
住民	・生活や地域の課題解決 ・新たな交流の場の獲得

モデルとなる企業誘致により、サテライトオフィス誘致が進む。古民家を活用したオフィス
に併設されたひみラボスペースでは、住民や研究者が、お互いの課題解決のために集まる。

STEP3　コミュニティと産業の多様化

氷見高校　富山大学　観光客
移住者
住民　↔　協議会
モビリティ サテライト 企業
地元企業　ひみラボが拡大

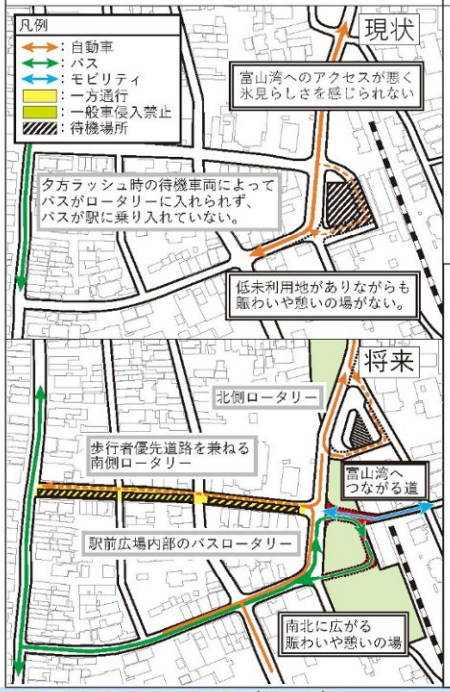
ひみラボでの各関係者のインセンティブ

サテライト 企業	・実際の利用データの取得→開発 ・地元企業や学校との共同開発
地元企業	・新企業と連携・高付加価値化 ・市民をモニターにした開発
高校・大学	・企業との共同研究 ・学生の社会実践の場
協議会	・担い手増加 ・イベントの活性化
移住者	・まちに馴染みやすい ・教えあいの関係の醸成
住民	・多様なイベント、交流 ・実践の場の獲得

ラボを目的に企業進出が進み、地元産業や高校との連携で地域の雇用と産業が活性化。
また、移住者の増加により多様なコミュニティが生まれ、ラボやまちでの挑戦が活発化する。

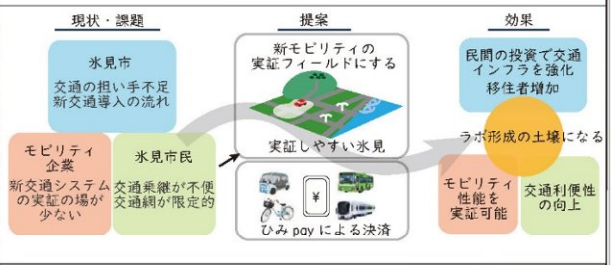
05 JR 氷見駅周辺デザイン

商店街から富山湾をつなぎ氷見の魅力を感じられる駅とする。
駅前通りや広場を人のための整備をしつつ、現状の交通課題
を解決し、氷見の玄関口として相応しい交通結節点とする。



06 挑戦都市氷見　モビリティ実証フィールド

氷見駅を起点とした二次交通を充実させる。新たなモビリティを市街地全体で実証・展開
することで、市民の足を確保し、氷見線や氷見駅からの交通の利用促進と、観光客の回遊
やまちなかの賑わいにつなげる。



「ひみ pay」モビリティ決済

（市民）乗継の円滑化
（モビリティ企業）利用データを蓄積・活用
（行政）店舗との連携促進、域内経済の活性化

モビリティデザイン

既存バスに加え、実証性能を組み込んだ小型
モビリティ・自動運転車を導入する。

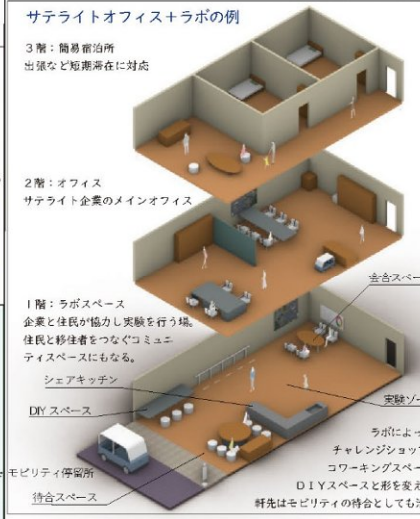




07 ひみラボ

「ひみラボ」は、サテライトオフィスに併設されたラボスペースとして整備され、まちに開かれる。
ラボスペースの整備効果としては、①産業活性化の場②コミュニティの場となることが挙げられる。

サテライトオフィス＋ラボの例



■空き家活用の仕組み

所有者の負担を減らしつつ、事業者のニーズに応じた活用を仲介

活用したいが不安　人をつなぐ　マッチング難しい

所有者 ⇔（貸与／支払い）ひみラボ ⇔（サブリース／家賃）新規事業者

- 所有者：・初期費用負担 ・最低限の改修
- ひみラボ：・空き家バンク・交渉 ・リノベ・DIY
- 新規事業者：・運営 ・維持管理

ひみラボの各主体はそれぞれの強みを活かし、
空き家の発掘・交渉から改修までサポート。

■ラボの効果①　産業活性化

ひみラボは、企業・住民の実験場であるだけでなく、地元産業
も巻き込む地域産業のハブとなる。企業と住民、企業同士が結
びつき、ラボで実験開発することで、商品の高付加価値化や業
務の効率化、販路の拡大といった直接的な効果に加え、地域内
での人材輩出にも繋がり、多方面から地域産業を活性化させる。

ラボにおける産業協働の例

AI × 漁業 ・AI を用いた漁獲量予想 ・養殖管理	**デザイン × 加工業** ・パッケージデザイン ・販促ページの作成
モビリティ × 福祉 ・送迎の効率化 ・パワードスーツ開発	**IoT × 観光業** ・AR を用いたまちあるき体験 ・オンラインツアー

■ラボの効果②　コミュニティの場

サテライトオフィスへの進出を機に移住した人々が、仕事や地
域との関わりを通して氷見を知り、住民と関係を築いていく。
ラボでの活動を通じて、住民の地域知と移住者の専門性を互い
に活かしながら、共に学び、つくる関係へと発展する。
やがて活動はラボからまちなかへ広がり、移住者と既存住民が
ともに気軽に挑戦できるようなコミュニティとまちを育む。

移住者目線でのコミュニティ形成



つくりあい、学びあうことで、ともにまちで挑戦できるコミュニティへ

08 駅周辺断面図（概略）



整理番号⑱-3


【湊川・旧蘭製品倉庫】旧蘭製品倉庫や天馬船を望む空間に、ラボで製作したファニチャー等を設置し、イベントの開催を通じて、ラボの成果をまちなかで活かす実践の場となる。
【商店街】空き店舗をオフィス・ラボに改修。モビリティ軸である商店街に開かれたつくりで、協働での実験開発とコミュニティを呼び込み、まちへ送り出す。
【漁火ロード】空き地にホテルを誘致し、新たな観光客の動線を生み出す。また、市民も気軽に集えるカフェなどの商業施設を設け、海沿いの賑わいと交流の拠点を形成する。
【旧こども園】広い教室と園庭を活かし、健康器具やモビリティなどの大型の実験を行ったり、屋内型のイベントスペースとして他の拠点の機能を補完する。
【氷見駅前通り】一方通行化し、送迎スペースをロータリーから移設する。拡幅した歩道は駅と商店街を繋ぐ動線を強化するだけでなく、パークレットやイベントスペースとして機能する。
【氷見駅前広場】バス用ロータリーを除き芝生の広場とし、待ち空間と憩いの場、そして実践の場となり、挑戦都市の顔となる。海への動線と氷見らしい景観のため、駅前から富山湾へ道路を貫く。
ラボとなる空き家・空き店舗
実践の場となる低未利用地
Ⓐ 移住者Aさんの活動
Ⓑ 住民Bさんの活動
ラボで漁獲量の予測ができて、仕事が効率的になった！
腰が痛くて仕事にならなかったけどラボで開発した装置で楽になった！
ラボで出会った専門家と一緒に天体観測！
4月 Ⓐ 地域に馴染めるか心配だな Ⓑ 新しい企業が入るらしい、どんな人が来るかな
富山湾
@ラボ
7月 Ⓐ 今日はBさんから良いアイデアをもらったなあ Ⓑ Aさんと実験をした、良い経験をしたなあ
朝日山公園
湊川
旧蘭製品倉庫
漁火ロード
10月 Ⓐ ラボにいつもきてくれるBさんと趣味が合うとは！ Ⓑ 今度Aさんと一緒に釣りに行こう！
旧こども園
車がなくても病院までラクチン！
モビリティを降りてみた。まさかの出会いがそこにあった!!
商店街
1月 Ⓐ Bさんに捌き方を教えてもらった！今度やってみよう！ Ⓑ 代わりにAさんにスマートデバイスの使い方を教わった！
手が離せないけどスーパーが家の前まで来てくれた！
3月 Ⓐ Ⓑ 今度の酒の肴イベントで駅前に出店してみよう！
知り合いのデザイナーにお店のライトを作ってもらった！
氷見駅前通り
氷見駅前広場
移動と買い物がこれ一台で済む！
¥
ひみPayでスムーズに乗り換え！
09 ワクワクするまち氷見
「次は何が起こるのだろう？」
あちこちで新しい活動が生まれ続ける氷見は、どのようにしてできあがったのか。
移住者のⒶさんと、もともと住んでいるⒷさん。二人の一年をたどりながら、
リビングラボが地域にもたらした変化を、人の目線で覗いてみる。